大嘗會御禊點地に於ける方角認識の基点

—東西間距離からみた「兵範記」仁安元年10月15日 条の解釈—

THE CARDINAL POINT AND THE PURPOSE POINT OF REALIZATION
FOR DERECTION IN DAIJOEGOKEITENCHI (大嘗會御禊點地)—The explanation of distance lying east and west from the item
of Hyohanki (兵範記) of October 15, Ninan Gannen.—

飯 淵 康 一

Kouichi IIBUCHI

It has been presumed from the item of Hyohanki of October 15, Ninan Gannen (the 1st year of Ninan era) that, the cardinal point to measure the distance when taking Daijyouegokeitenchi lying on the direction of east and west. Thus the possibility has been shown that such point should be placed inside of the Seiryouden, not placed in the Higashinomigiri (East side) of Seiryouden or the Hitujisarudan (Southwestern of the plat) of Shishiiden as others considered.

keywords:Hyohanki,Daijyouegokeitenchi,distance,cardinal point,Daidairizukosyo,excavation

兵範記、大嘗會御禊點地、距離、基点、大内裏図考證、発掘

はじめに

筆者は前に平安期に於ける遊行神の方忌に関し、太白神による場合を取り上げ、その忌の領域について検討を加えることがあった¹⁾。方角を認識する場合、基点から目的点までの東西間、南北間距離がそれぞれ測定されこれらをもとになされていたことが知られる。

然しながらこれらに関する記録を収集しても、基点及び目的点の具体的位置・箇所そしてまたこれらの間の距離が詳かに記された例を見出すのは極めて難しい。

厳密に距離が測定され、その方角が天皇の忌方にあたるか否かが慎重に検討された大嘗會御禊點地についても同様であり、その具体的様子が知られる例は殆ど存在していない。その中でも「兵範記」仁安元年(1166)10月15日条は、方忌測定の際の基点および目的点の具体的位置は記されないものの、これらの間の東西間、南北間距離が知られ注目に値する。

この「兵範記」条はすでに「大内裏図考證」²⁾に於いても取り上げられ、基点の位置が推定されている。またこの

条には東西行、南北行の距離が具体的に記されていることから、京程に関する論争の過程に於いても注目されてきたが、川勝政太郎氏はこの中でやはり基点について言及している³⁾。しかしながらこれら両者に於いては基点の位置の捉え方が異なっていた。

本論ではこれら両者を検討することにより、大嘗會御禊點地に於ける方角認識の基点として果してどの場所が当てられていたのかについて改めて考えてみることにしたい。基点の位置を探るためには上述のように東西間および南北間距離のそれぞれの観点から検討する必要があるが、南北間については距離数は示されるものの目的点の位置が具体的に示されないため、これらをもとに基点の位置を推定するのは極めて難しい。今回はまず東西間距離の点から基点が設けられた範囲について検討する。

当時の貴族達にとって方忌は大きな関心事の一つであり、平安京に於いて方角認識がどの様に行われていたのかを具体的例を通し理解することは極めて重要な課題であろう。

本論は1993年6月に日本建築学会東北支部研究報告集第56号に発表した同名の論文をもとにしている。

東北大学工学部建築学科 助教授・工博

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Univ. of Tohoku, Dr. Eng.

1. 「兵範記」仁安元年(1166)10月15日条に対する従来の見解

永萬元年(1165)6月25日六條天皇は二條天皇のあとを受け受禪したが、翌仁安元年10月27日には即位に伴う大嘗会のための御禊が行われた。これに先だつ10月15日には御禊地定が行われており、「兵範記」の記録はこの時のものである⁴⁾。

次陰陽寮臨頓宮跡所打丈尺、立札於四方、指樺等、郡點地東西四十丈、南北四十五丈、次召檢非違使、令判官史仰云、今日以後、點地内外早掃除汚穢物、并牛馬制止亂入者、…(中略)…

陰陽寮

勘申、點定大嘗會御禊地事、

乙方、卯與辰之間、(二條大路北邊、鴨川西邊)

自御在所東行八百卅丈、(京内六百九十九丈、京外百卅一丈、)

自御在所南行二百六丈、

右自侍賢門末鴨川西邊、至于郁芳門北小路是卯地、自郁芳門北小路、至于三條大路北小路、是乙地内也、仍勘申如件、

仁安元年十月十五日 陰陽師菅野宗成、

少屬大中臣知貞、

小充大中臣季倫、

大舍人頭兼助安倍朝臣泰親、

主計頭兼備中權助賀茂朝臣在憲、

二條大路末南北、共爲吉方由、兼日奏聞、其中依

天仁吉例、被點地於北邊也、自二條末以北十九丈、

限點地南了、御在所可當冷泉末程云々、(下線筆者)

即ち、御禊地は鴨川の西側で、二條大路の延長線より北側に相当する場所に設定されたが、この地は基点の御在所より東西間距離で830丈(そのうち京内部分が699丈、京外部分が131丈)、南北間距離で206丈の位置にあり、方角で言えば乙方にあたるとされている。またこの御禊地は東西40丈、南北45丈の領域を有しており、その南限は二條大路北辺⁵⁾の延長線上より北側に19丈の位置とされる。この様に目的点は具体的には記されないものの、基点から京内外の境界までの東西間距離が示されている。また基点は御在所と知られるもののこの具体的建物名についての記述はない。「大内裏図考證」および川勝氏はこの基点に対しどの様に解釈したのだろうか。以下、順に検討していくことにする。なお、御禊当時の皇居は内裏であった。

「大内裏図考證」の立場

「大内裏図考證」卷第三附録續録には「兵範記」同日条が引用され「兵範記、仁安元年、御禊點地、丈尺考」と題する図が掲載されている(図-1・後掲)。そして図中には次の様な書き入れが認められる。

自御在所至京極大路東邊六百九十九丈 但京極大路十

丈定

この書き込みと共に清涼殿の東砌⁶⁾の位置から東方に破線が描かれており、この延長線は賀茂川の西辺で南に折れ御禊地に至っている。またこの線に沿って

至御禊屋至乾角二百六丈

との書き込みもなされている。従ってこの破線は「兵範記」に記された東西間距離、南北間距離を解釈し説明したものと思われる。「兵範記」の言う御在所を具体的には清涼殿の東砌と理解していた⁷⁾。

即ちここを基点としここから京極大路東辺までの距離を699丈としたのである。

さて、基点を清涼殿の東砌とした根拠について考えたのが「大内裏図考證」に於いても後述する川勝氏と同様、京城の東境界より逆算して西に699丈の位置をもって基点と推定したと考えられるので、この699丈の内容について吟味しようとするのである。

まず大内裏外の部分から見てみよう。図中にはまた

自御在所東砌至宮城大垣心(大宮大足西側牆也)百四十丈

と記されている。従って

大内裏(宮城)東大垣心から京極大路東辺までの距離を計算すると

$$699 - 140 = 559$$

559丈となる。この値は「大内裏図考證」卷第一で「延喜式」卷四十二、左右京職等により考定された町・路の丈数をもとにして計算した距離558丈⁸⁾と比較すると1丈の差が生じる。因みにこの558丈と、御在所東砌から宮城大垣心までの距離とされた140丈をもとに、御在所東砌より京極大路東辺までを計算すると698丈になってしまう。補訂者広前もこの矛盾に気づいており図中に於いて、巾員10丈の京極大路の東辺のさらに東に1丈の地点を設定しないと清涼殿東砌からの距離は699丈とならないことを指摘している⁹⁾。

ところが、図-1には前述の破線にそって、

自川西畔東行百三十一丈

の書き込みもなされている。この131丈は、前述のように京外に相当する部分の長さであった。上掲文の川とは京極川のことであるが、この条はまた換言すれば京極川西畔より西側を京内と見做すということも示しているのである。「大内裏図考證」の京極大路に関する図(図-2)をみると、広10丈の京極大路の東垣心、即ち京極大路東辺と中川(京極川)との間隔はちょうど1丈と見做されている。従って、この川の西畔を京内外の境ととれば、大内裏(宮城)東大垣心からここまでの距離は559丈となり数字的には合うことになるのである。

この様に「大内裏図考證」では、京城の境界を東京極大路東辺と見做しながら、丈数の計算を行うに際しては何故かこれより1丈東の川の西畔をもそれとなしたという

点に特徴が認められる。

さて次に大内裏内について考えてみたい。「大内裏図考證」(図-1)では御在所東砌と大内裏(宮城)大垣心との間の距離を前掲のように140丈とみたが、また図中には、

自御在所東砌至建春門四十六丈

とも記されている。即ちこの差は94丈となるが、この値は図-1では壬生大路10丈、匣小路4丈、さらに2町分(40丈、40丈)の和として示されている。ここでいう建春門は内裏東外郭と同義と見做されていることが以上の計算よりわかるが、因みにこの94丈について「大内裏図考證」巻第二之下で考定された宮城図(図-3)をもとに計算すると、当然のことながら一致した値となる¹⁰⁾。さて、御在所東砌から建春門までの46丈についてである。「大内裏図考證」巻第九には内裏内郭について

南都所傳一古圖曰、東西五十七丈、南北七十二丈、

南相距外郭、十丈、北十八丈、東西各八丈、

とあり、内裏内郭の東西長が57丈、内裏内郭と(建春門の設けられていた)東外郭との間隔が8丈であったと見做している。承明門と紫宸殿の中心軸は内裏の南北中心軸と一致していたと考えられるので、建春門と承明門および紫宸殿の南北中心軸との距離は、

$$57 \div 2 + 8 = 36.5$$

36.5丈ということになる。つまり、基点はこの中心軸より

$$46 - 36.5 = 9.5$$

9.5丈西に設けられていたということになる。

「大内裏図考證」巻十之下、十一之上に於いては、紫宸殿の母屋を桁行9間、紫宸殿母屋西端より清凉殿東孫庇東端までを6間と見做している。紫宸殿の桁行柱間は1丈¹¹⁾とされ、また他の部分の柱間規模も同様であったと見做すことができるが¹²⁾、南北中心軸より9.5丈西側は丁度、清凉殿の東砌の位置となるのである(図-4)¹³⁾。「大内裏図考證」(図-1)ではこの様な手続きを経て基点の位置を推定したものと思われる。

ところで図-1をさらに詳細にみると、図中上方には清凉殿の広庇より東方に破線が描かれこの説明として

凡六百九十九丈

と記されている(下線筆者)。清凉殿の東砌とは見做したもののここを基点とするのはためらわれ広庇の東端と見做したかったのではないだろうか。凡という表現にこれをうかがうことができよう。

川勝政太郎氏の立場

さて、次に川勝氏の意見に耳を傾けよう。氏は京内の東端を京極大路の東辺(東側)と見做しているが、京内の東西間距離699丈に関し次の様に考えた(図-4参照)¹⁴⁾。

京極大路東側から壬生大路東側線まで 642.0

内裏外郭東側道幅 15.0

同 外郭内郭間の幅 8.0

同 内郭中心線まで
(57丈の半) 28.5

合計 693.5

即ち、まず上記の様に京極大路東辺から内裏すなわち紫宸殿の南北中心軸までの距離を求め693.5丈と出している。次に、京内距離699丈との差、5.5丈を求め、従って基点は内裏中心軸より5.5丈西側に設けられたとしたのである。この点は丁度、紫宸殿西庇の西端及びその延長線上に存在することになる(図-6)。

ところで、上掲したように氏は京極大路東辺(東側)から内裏中心軸までを693.5丈と見做したが、この過程に氏の特色が認められよう。まず、京極大路東辺より宮城大垣までの距離を図-5にみると、大路、小路の巾員および町の丈数は「大内裏図考證」巻第一之上に記された値と同様であり、その合計値は558丈となっている。また大内裏(宮城)東大垣より、壬生大路東辺までは、84丈であり、この値も「大内裏図考證」の図-3での値と一致する。即ちこれらの合計が642丈となる。また、内裏外郭内郭間の巾8丈、内裏内郭と内裏内郭中心線までの距離28.5丈も「大内裏図考證」と全く同じ立場をとっている。然しながら内裏外郭東側道路(壬生大路、美福門大路)の巾員についてみると、図-3では10丈と見做されるにもかかわらず氏は15丈としている。

この値について、「大内裏図考證」の校訂者、広前は固禪の10丈とする案に対し、様々な理由を挙げ15丈でないと辻妻が合わないと考えた¹⁵⁾。これをもとに描かれたのが、増訂故実叢書に収められた「京城略図」であり、ここではこの値が15丈とされている。「平安通志」にはこれに基づいた図が掲載されている。今日、平安宮の古図が何枚か伝えられているが、この様な観点からこれらを見た時すべて10丈の中で描かれており、15丈の例を認めることは出来ない。川勝氏が何故この値を採用したのか不明であるが、この点に氏の特徴が認められよう。

結局、川勝氏は、南北間距離についても、目的点の位置を仮定することによって基点の位置を推定し、東西間距離で推定した位置と合わせて、紫宸殿の坤壇上に基点が設けられたとするのであるが、「兵範記」には基点として御在所と記されるにもかかわらずこれを紫宸殿の壇とすることに対しては、清凉殿のみならず紫宸殿も御在所と呼ばれたから差し支えがないとしたのである。

この様に「大内裏図考證」では清凉殿の東砌、川勝氏は紫宸殿の坤壇を基点と見做している。然しながら、「玉葉」文治3年(1187)6月12日条には、時の里内裏閑院に関し方違行幸に用いる門が太白神の方角にあたるか否かについて

自夜御殿、當太白方哉否、

とあり、方角認識の基点は夜大殿¹⁶⁾であったと記されて

いる。果して仁安3年の場合の基点はどこに設けられていたのであろうか。

2. 方角認識の基点

具体的検討に入る前に、御禊地の方角を決めるための距離の測定が実際どの様におこなわれたのかについて見ておく必要があるだろう。

「中右記」には天仁元年(1108)9月27日に行われた鳥羽天皇の大嘗會御禊點地の様子が記してある。この時の御禊地は鴨川西岸、春日小路末に設定された¹⁷⁾。

今日令左中辨從清涼殿南至中御門東至左衛門陣令打丈尺、是河原點地之時爲令槌丈尺也、仍以木工寮官人令持丈尺、行事史相共打之、

この場合は、清涼殿¹⁸⁾からの距離が測定されたが、実際に丈尺があてられたのは南は中御門まで、東は左衛門陣までの図-7¹⁹⁾に示す範囲のみであった。即ち、この範囲のみを測定すれば良かったのである。ここでいう中御門とは大内裏中の中御門大路の北辺のことであり、左衛門陣とはこれが設けられ建春門が開かれた内裏東外郭の心を指すものと考えられる²⁰⁾。大内裏のそれ以外の部分及び京内に関しては

至 京内者丈尺顯然也、
とされ、その距離は顕らかなこととされている。

「江家次第」巻第十四大嘗會御禊定の項には御禊點地次第に関し

次召左京職官人令申京條丈尺、然後令勘申件勘文とあり、勘文を勘申するに際し左京職官人に京内の丈尺を報告させている。左京職に問うているので、「延喜式」巻第四十二左右京職に記される値が用いられたのではないだろうか。同じ「江家次第」巻第六齋院御禊點地の項には、京内の大路・小路の種類と巾員および町の数と大きさが記されており、ここに於いてもこれらをもとに距離の計算がなされていたことを知ることが出来るのである²¹⁾。

平安期の大嘗會御禊に関する記録を通覧すると、大膳職²²⁾や一本御書所²³⁾が発源地即ち方角認識の基点となった場合もあり、必ずしも清涼殿に固定してはいなかった²⁴⁾。上述の天仁元年(1108)の鳥羽天皇の場合も前の堀河天皇が大膳職を基点としており、従って改めて、清涼殿から中御門大路までと、左衛門陣(内裏東外郭即ち壬生大路西辺)までの距離とが測定されたものと思われる²⁵⁾。大内裏内の中御門以南、左衛門陣以東で距離が測定されなかったのは、これらの部分が洛中に準じた規模を有していたためであろう。

御禊地は通常鴨川べりに設けられたが、この場所も天皇により一定してはいなかった²⁶⁾。東京極大路より御禊地に至る洛外の分についてはその都度測定されたのであろう。また、御禊地内の各施設の設置については木工寮が距離を測定しながらこれを行っている²⁷⁾。実際にはこれらの手続きを経て、御禊地までの距離の計算が行

われたのであるが、いずれにせよ洛中の条坊制に則った部分については丈尺をあてず既知の数値が用いられたのである。

仁安元年(1166)の場合は、前掲「兵範記」10月15日条に、天仁の吉例に倣い御禊地を二條大路末より北側に選定したとあり、また同条には點地の次第について

此間陰陽頭賀茂在憲朝臣、助安倍泰親朝臣、臨地頭打丈尺草勘丈、寮官引率木工寮、以丈尺杖隨命奉仕之、打杭引繩、此間使歸來、長官已參給云々、次長官自南方被參來、(駕毛車)、先乍車被見廻、是天仁例也、
(下線筆者)

とも記されている。この様に、仁安元年の御禊點地は様々な点で天仁元年の例を手本としたことが推定される。距離の測定に於いても同様だったと思われるのである。

さて、上述のように内裏を中心とした部分に関しては、実際に距離が測定されていた。従って方角認識の基点がどこであったのかを探ろうとする時、大内裏に於ける内裏の位置および建築の配置が実際はどうであったのかが問題となってくるだろう。

近年大内裏に関する発掘が進み、内裏についてもかなり具体的にその位置が知られるようになってきた。今日これらの成果に基づく復元図も作製されてきている²⁸⁾。

これらのうち、京都市埋蔵文化財研究所より提供された5000分の1の復元図は垣、築地などの芯々線をもとに作図されているが、これによれば大内裏の東西規模、南北規模はそれぞれ「大内裏図考證」巻第二之上に記される384丈、460丈、²⁹⁾と同一の長さで復元されている。また東西間距離の点から大内裏(宮城)東大垣と左衛門陣の置かれた内裏の東外郭間の距離についてみるとやはり94丈³⁰⁾であり「大内裏図考證」の立場と一致するが、内裏内郭の位置については微妙な食い違いを見せている。そして、この部分こそが実は天仁元年に於いて実際に丈尺をあて、距離が測定された場所に相当するのである。

発掘によって内裏内郭西側と承明門の一部が明らかにされ、内裏の中心軸上にあると推定される地鎮の跡も発見された³¹⁾。これらにより、現在内裏に関し以下の点が判明している。即ち、内裏内郭西回廊心は推定朱雀門南北中心軸(即ち、大内裏中心軸)より東へ34.5丈、また、承明門心(即ち、紫宸殿中心軸)は東へ62.5丈の位置とされた³²⁾。因みに「大内裏図考證」で考定された図-3をもとにこれらの値を計算するとそれぞれ33丈、61.5丈となり、川勝氏の案では28丈、56.5丈となる。紫宸殿中心軸は「大内裏図考證」の立場と比べ1丈東にズレていたことになり、またこの結果は川勝氏の前提とは大きく異なっている。ついでに、南北間距離の点より大内裏(宮城)南大垣心と内裏内郭南回廊心との間の距離をみると復元図と図-3とは同様であり共に22.6丈と見做されている³³⁾。

この様に、東西間距離の点からみた場合、発掘の成果は注目に値しよう。

平安宮内裏の建築の平面規模については周知のように「大内裏図考證」による復元その他、これを再検討し提案された奈良国立文化財研究所によるもの³⁴⁾、また最近の鈴木巨氏によるもの³⁵⁾が知られている。これらについて、東西間距離の点から紫宸殿、清凉殿およびこれらを結ぶ廊のそれぞれの柱間数、柱間規模についてみると、柱間数についての違いは認められないが、鈴木氏の案は紫宸殿の東西庇の梁行を他の部分の1丈と違って1.25丈とする点で前二者のすべての部分を1丈とする案と異なっている。

これらの部分に関する発掘が全く進んでいない現状ではいずれが妥当か決することは難しい。然しながら、鈴木氏の案に対し、奈良国立文化財研究所の案は平面規模が具体的に図示されているので、本稿ではこれに基づき検討を進めることにしたい(図-8)³⁶⁾。

さて、以上の前提のもとに、方角認識の基点について考えてみよう。仁安元年(1166)も天仁元年(1108)と同様の測定法が行われたと考えるとやはり京内東端より、大内裏(宮城)東大垣までと、ここから左衛門陣(内裏の東外郭即ち壬生大路西辺)までは既知の値を用いたものと思われる。

ところで「大内裏図考證」も川勝政太郎氏も京内の東端をそれぞれ設定し、この位置から逆算して699丈の位置を基点と考えたわけであるが、この京内をどうとるかについても一言しておくべきであろう。というのも「延喜式」巻第四十二、左右京職、京程の項には平安京に関する規模が記してあるが、東西行についてみれば京の全体規模として記される1508丈(即ち、朱雀大路中心よりみると東京極大路外畔までは754丈)と、これを構成する要素として続いて記される町の規模や路の中員の合計値1500丈(即ち、朱雀大路中心より東京極大路東辺までは750丈³⁷⁾)とは8丈(左京のみでは4丈)の差があり一致しないからである。つまり「兵範記」仁安元年条に言う京内とは東京極大路外畔までを指すのか、あるいは東京極大路の東辺までを指すのか、さらに前に「大内裏図考證」の立場で検討したような場所であるのかが問題となってくるからである³⁸⁾。

然しながら、ここで再び「江家次第」の齋院御禊點地の項をみると、ここには京内の町や路の数と大きさ、中員が記されるのみであり、京極大路外畔に関する記述を認めることは出来ない。また、京極大路の中員は「延喜式」と同様10丈と記されている。この点からみるとやはり「兵範記」に言う京内とはやはり東京極大路東辺より西側と見做すべきであろう。

さて、東京極大路東辺より大内裏東大垣までは「延喜式」をもとに558丈、ここから左衛門陣(東外郭)までは前

述のように94丈であった。

従って基点は、

$$699 - (558 + 94) = 47$$

となり内裏東外郭より47丈西側に設定されていたことになる。

発掘結果によれば承明門の中心線すなわち内裏の南北方向中心軸は推定朱雀門心より62.5丈東に位置していた。従ってこの軸は左衛門陣より

$$384 / 2^{39)} - (62.5 + 94) = 35.5$$

35.5丈西側ということになる。

即ち、基点は内裏中心軸より

$$47 - 35.5 = 11.5$$

11.5丈西側に設定されていたということになる⁴⁰⁾。そしてこの値は前に「大内裏図考證」の立場を検討した際の値(9.5丈)より2丈多くなっている。この位置は図-9、①に示すように清凉殿東庇、校書殿・安福殿の東庇の柱列線に相当する⁴¹⁾。

ところで以上の検討は、実際に距離が測定された部分についても測定に際しては大内裏あるいは平安宮造営時に用いられた計画尺、即ち「延喜式」に記されるものになった丈尺と同じ長さの丈尺が用いられたものと仮定して行ってきた。しかしながら、この点についても一応疑ってみる必要がありそうである。

福山敏男氏は、法勝寺造営に関して、承保3年(1076)7月に陰陽寮から出された勘文をもとに、承保の丈尺について検討している⁴²⁾。この場合は大嘗祭御禊點地の場合と異なり、時の里内裏たる六條殿からの方角をみるため法勝寺まで実際に縄を引いて東西方向、南北方向それぞれにすべての距離が測量されたが、この勘文に記されたこの数値と、「延喜式」左右京職に記載される数値をもとにした距離を比較し、以下の表を作製した⁴³⁾。

承保勘文 延喜式

(1)六条坊門小路南辺から		
二条大路北辺に至る	623丈2尺	645丈
(2)六条坊門小路南辺から		
押小路北辺に至る	568丈2尺	588丈
- 即ち氏は、承保勘文に用いられた尺は「延喜式」の尺よりも延びていたと見做したのである。これをもとに計算すると、承保勘文の1尺は「延喜式」の尺のほぼ1.03倍の長さに相当していたことがわかる。

仁安元年(1166)は承保3年(1076)よりかなり後ではあるが、この時距離の実測に用いられた丈尺も実際は「延喜式」の尺より延びていたと見做すことは出来ないであろうか。このような可能性はあり得べきことのように思われる⁴⁴⁾。

仮に、仁安元年(1166)の尺が承保3年(1076)の尺と同じであったとして計算してみよう。前述のように東西間について実際に距離が測定されたのは基点から左衛門陣

すなわち内裏東外郭部までの間であり、この値は47丈であった。この値を「延喜式」の尺に換算すると、48.4丈となる。この値をもとに基点の位置を推定すれば、清凉殿の母屋東第1間と第2間との間を通る南北線上ということになる。距離測定の基点は建物の柱列上に設けられたと仮定する時、例えば基点が清凉殿で言えば母屋東第1間の東側柱列上に設けられたとすると、仁安元年(1166)の尺は「延喜式」の尺より約1.02倍延びていたということになる(図-9、②)。この線上には夜大殿の東面の柱列も載っている。仁安元年の尺がこのような可能性は十分にありうる。「兵範記」に言う御在所とはやはり夜大殿をも含む清凉殿の母屋にあったと考えられるからである。

以上のようにして、東西間距離の点から方角認識の基点の位置について検討した結果「大内裏図考證」および川勝政太郎氏とは異った立場を得ることが出来た。

おわりに

大嘗會御禊點地に関し、距離・方角が具体的に記される「兵範記」仁安元年(1166)10月15日条をとり上げ、様々な仮定に立ちながらも距離測定に於ける基点の位置を推定しようと試みてきた。

平安期に於いて方角の認識は、基点から目的点に対して東西方向、南北方向それぞれに距離を測定し、これらの比をもとになされている。大嘗會御禊點地の場合も例外ではない。御禊地までの距離の値は、実際に測定し得られた値と、洛中およびこれに準じた場所に関する既知の値との和として求められたものと考えられる。距離が測定されたのは大内裏中内裏を中心とした部分と洛外御禊地に関する部分に関してであった。

今日、内裏については発掘が進みその姿が明らかにさ

れつつあるが、特に東西間距離の点からみた大内裏内に於ける位置については、従来の理解と異なった成果が得られている。また内裏の建築平面規模については「大内裏図考證」での復原案をふまえた新たな提案もなされている。さらに距離の実測に用いられた丈尺の長さについても勘案すべきであろう。

これらをもとに東西間距離の点から基点の位置を推定すると、「大内裏図考證」および川勝氏によって提案された清凉殿東側や紫宸殿坤壇に対し、清凉殿の母屋を通る南北線上に設けられた可能性を指摘することが出来た。従って夜大殿が基点であった可能性も十分に存在することになる。

さて、このようにして仮にこの基点が清凉殿内に設けられていたとすると「大内裏図考證」および川勝氏の、共に地上部分に設けられたとする案に対し、床上部分ということになる。これに関しては前掲「兵範記」天仁元年(1108)9月27日条が参考になろう。即ち、御禊點地の距離測定の分担について

御殿之上蔵人沙汰也

と記されるが、この記述は基点が床上部分に設けられていたことを何よりも雄弁に示している。

本論では、東西間距離の点から基点の位置を推定したにすぎない。しかしながら前に述べたように、より正確にその位置を探るには南北間の距離の点からの検討と照らし合わせる必要があるのは言うまでもない。稿を改めて考えてみたい。

付記

発掘による大内裏の復元規模に関し京都市埋蔵文化財研究所の辻純一氏、古代学協会・古代学研究所の寺升初代氏に大変御世話になった。ここに記し謝意を表したい。

図-1 「兵範記」、仁安元年、御禊點地、丈尺考(「大内裏図考證」による)

図-6 基点の位置(川勝氏の立場)

図-7 天仁元年(1108)の距離の測定範囲

図-8 平安宮内裏内部南半部復元図
(奈良国立文化財研究所による)

図-9 基点の推定位置

註

- 1) 拙稿：太白神による方忌み・平安京および寝殿造からみた。日本建築学会計画系論文報告集。第411号。1990年5月。
- 2) 新訂増補故實叢書。
- 3) 川勝政太郎：仁安元年御稜點地と左右京程の問題。史迹と美術。第260号。昭和31年2月。
- 4) 増補。史料大成による。原文の割註部分については()で示すことにする。なお、本論はこの「兵範記」条の記述と「大内裏図考證」の御稜點地の様子を具体的に解釈した後掲・図-1を基本史料として展開している。
- 5) 二條大路より北側の位置を示している。その規準は大路の北辺にあったと考えられる。後述するように川勝氏もこの点については同様の立場をとっている。
- 6) 図-1によれば簀子の位置に砌と記されるが誤記である

- う。砌は簀子の東方(図中では左)の長い破線の基点と考えられる。
- 7) 後で紹介するように図-1には、自御在所東砌至建春門四十六丈、また自御在所東砌至宮城大垣心(大宮大路西側塙也)百四十丈とも記され、清涼殿東砌を基点と考えていたことが知られる。
- 8) 町が各40丈(×12)、大宮12丈、西洞院8丈、東洞院8丈、京極10丈、堀川8丈、小路各4丈(×8)即ち合計558丈となる。「大内裏図考證」では堀川小路と東京極大路のそれぞれの路巾8丈、10丈について垣心間距離と見做した復元図をのせている。
- 9) “広前按、溝共一丈とする時は”とある。但しこの一丈は十丈の誤りと考えられる。
- 10) 大内裏内の壬生大路10丈、櫛笥小路4丈、大内裏東

大垣の西側道路5丈、さらに2町分(40丈、35丈)の和として示される。なお、理解を助けるため図中に若干の書き入れを施している。

11) 巻第十之上。

12) 「大内裏図考證」には、部分的ではあるが内裏に関する復元平面図が何面か収められている。これらによれば主要殿舎の柱間寸法は1丈である。後述する「平城宮発掘調査報告Ⅲ」でもこれを1丈とみなし、内裏主要部分の復元平面図を作製している。

13) 「大内裏図考證」をもとに、紫宸殿、清凉殿部分について作図したものを用いた。

14) 前掲、川勝政太郎氏論文より転載。

15) 「大内裏図考證」第二之下。

16) 内裏・里内裏に於いて夜御殿は通常、夜大殿を指すものと解される。

17) 同、10、21条。但「殿曆」同日条には冷泉院小路末とある。

18) 川勝政太郎氏も前掲論文に於いてこの条を引用し、この場合は清凉殿が基点であったことを認めている。しかしながら前に紹介したように仁安元年の場合は紫宸殿とした。

19) 但し、大内裏図は、京都市埋蔵文化財研究所提供の1:5000を縮小し用いている。また、理解を助けるため若干の書き入れを施している。

20) ここで言う中御門を大内裏中の中御門大路南辺とすると、この位置は官衙中務省等の北垣となり、「中右記」に中御門とは表記されないだろう。また、左衛門陣については「大内裏図考證」巻第6に、建春門について南都所傳圖、日、謂之左衛門陣、と記されている。上掲「中右記」の左衛門陣とは、建春門の設けられた内裏外郭の心を指すものと考えられる。このように考えないと、後述するように、ここから東を測定しなかったことの説明が難しい。

21) 「江家次第」に記された数値を「延喜式」左右京職と比較すると「延喜式」では、東洞院、西洞院大路を各8丈とするが「江家次第」では各10丈としている。しかしながら「拾芥抄」所収の古図にも8丈と記され「大内裏図考證」でも8丈と見做している。また、平安京に対する発掘結果(「仏教芸術」150号、毎日新聞社1984)も条坊遺構は「延喜式」の記載と矛盾のない事を示している。従って「江家次第」のこの大路に関する記載は各8丈の誤記と考えておく。また「江家次第」には、自御在所至河原打丈尺定方角とあるが、京内についてはここに記された数値を用い計算したものと思われる。このように考えないと、ここに細々とした数値が記されていることの意味が理解出来ない。

22) 寛治元年(1087)10月22日の堀河天皇の場合がこれに相当する。「兵範記」仁安3(1168)9、8条。

23) 崇徳、近衛、後白河天皇の場合がこれに相当する。それぞれ「皇年代略記」保安4(1123)10、15条、「台記」康治元(1142)10、25条、「兵範記」久寿2(1154)10、29条。

24) 大膳職や一本御所が用いられた理由は詳かではないが、方忌に関係するのかも知れない。なお、近衛天皇の場合は崇徳天皇の例に倣ったとされる。

25) 前掲「江家次第」齋院御親點地の項に京内の町、路の規模のみが記され、大内裏や洛外について記載がないのは、これらは実際に距離が測定された部分であったからであろう。

26) 二條末、三條末などが用いられている。

27) 「江家次第」大嘗會御親定の項。また仁元年の場合も「中右記」同10月3日条、10月14日条により同様であったことを知ることが出来る。

28) 辻裕司：平安京、仏教芸術154号、毎日新聞社1984年5月。辻裕司：平安京、宮都発掘、吉川弘文館、昭和62年10月。京都市埋蔵文化財研究所提供の大内裏復元図、1:5000。これらの図は、築地、回廊などの心線によって表現されている。1:5000の復元図については、1尺=29.847cmの値を造営尺として設定している。なお最近寺升初代氏により、最新の発掘成果に基づく平安宮復元図等が発表されたが、東西間より見た大内裏内に於ける紫宸殿の位置については本論の立場と全く同一である(「平安宮の復元」、『平

安京提要』所収、角川書店、平成8年6月15日)

29) 「大内裏図考證」に古圖日、宮城東西三百八十四丈、南北四百六十丈、各自垣半計之。とある。

30) 図-2によれば、この距離は94丈である(5+35+4+40+10)。京都市埋蔵文化財研究所による1:5000の復元図でも同様94丈と見做している。また「平安京提要」(前述)付図(九條家本「延喜式」付図および陽明文庫本「宮城図」に描かれた平安宮の姿を、発掘調査で検出された遺構に合致するように復元・作図したもの。古代学協会・古代学研究所第三研究室によるでも同様の見解をとっている。この94丈の値が川勝氏の案と比較する時重要になるのである。)

31) 地鎮遺構は4基発見されたが、これらは南北一直線上に並んでいたとされる。従って、内裏の南北中心軸は基本的に移動しなかったものと思われる。

32) これらの数値は、京都市埋蔵文化財研究所からの御教示による。「平安京の復元」1991年、11月25日。

33) 内裏南内郭、南外郭間の距離は巻第9(前掲)により10丈と知られる。また、1:5000の復元図については図の実測による。

34) 平城宮発掘調査報告Ⅲ、昭和38年8月。

35) 平安宮内裏の研究、中央公論美術出版、平成2年12月。

36) ついでながら南北間距離の点より、紫宸殿西北廊の東方向中心軸と南回廊内側柱間の柱間数をみると「大内裏図考證」第十二之上、年中行事畫路弓及御齋會圖、右近陣及垂板敷圖(額間以北雲圖抄路弓圖及台記別記路弓圖補之)によれば25間、また同第十二之下、據諸圖書考定安福殿圖をもとにすると、26間となる。奈良国立文化財研究所の案では25間、鈴木亘氏の案では26間と見做している。これら両者に於ける違いは春興殿および安福殿の南側の軒廊を2間とみるか、3間とみるかに大きくかわっている。また、南回廊梁間についてみると本文で述べたように奈良国立文化財研究所の案では1.2丈、鈴木氏の案では1丈と見做している。従って、紫宸殿西北廊の東方向中心軸と南回廊心間の距離は奈良国立文化財研究所の案では26.2丈、鈴木氏の案では27丈となる。その差は8尺である。

37) 朱雀大路の中の半分14丈、大路(10丈、12丈、8丈、8丈、10丈)小路12(各4丈、但し、堀川小路は4丈×2)、合計750丈。東西間距離よりみた平安京の規模については、今日この理解が最も妥当なものと考えられる。「大内裏図考證」でも同様の立場をとっているし、最近発刊された「平安京提要」(前述)付図(京都市埋蔵文化財研究所の復元案をもとに、古代学協会、古代学研究所第三研究室が作図)でも全く同様である。本論の立場もこれらと同じである。

38) これに関し、京職の管轄領域の点からみると、大石良材氏は、京極大路の外側の外畔をも含め京内とみなしているが(式の京程の考定(上)、史述と芸術28-9、昭和33年11月)、大井重二郎氏は、京極大路の垣基より外は所管外とみて(平安京の京程に関する疑問、史述と美術、250号、昭和30年3月)おり意見が定まらない。「類聚三代格」に引く貞観7年(865)

11月4日の太政官府によると、道路や溝洫の清掃について京職が監督すべきことが記されており、これによれば、東極大路東辺より以西が管轄内であったように思える。

39) 大内裏の東西間規模は前述のように384丈である。

40) 実際には、このようなめんどろな手続きを取らず、直接に内裏中心軸からの距離を求めることも出来る。しかしながら、本論では前に述べた距離の測定法に則り左衛門陣を基準として考えている。

41) 仮に鈴木亘氏の提案を用いるとすれば、この位置はさらに2.5尺東側に移動することになる。

42) 福山敏男：六勝寺の位置、日本建築史研究、墨水書房、昭和43年。

43) 本論に関係する部分のみ掲載した。

44) 杉山信三氏も「平安京の造営尺について」(史述と美術34-2、昭和39)に於いて、このような可能性を示唆している。

(1995年5月25日原稿受理、1995年10月2日採用決定)